

## 【開催概要】

国際シンポジウム「日本と東アジアの〈仏伝文学〉と天竺世界」  
二〇一四年七月二十六日（土） 九時～十九時十分  
於 立教大学池袋キャンパス 四号館四四〇六教室

## ◆基調講演

- ① 日本と東アジアの〈仏伝文学〉——近代と前近代を繋ぐ  
小峯和明（立教大学名誉教授）
- ② 仏伝文学に見えるエロティックな記述を中国人はどう受け止めたか  
——『仏所行讃』を中心として——  
石井公成（駒澤大学仏教学部教授）
- ③ カトリックと仏陀——明訳『聖若撒法始末』についての試論（天主教興  
佛陀・試論明譯本《聖若撒法始末》）  
李 爽學（台湾中央研究院研究員）

## ◆第一セッション「中国の〈仏伝文学〉と天竺世界」

- ① 『釈迦如来成道記』をめぐる  
李 銘敬（中国人民大学教授）
  - ② 宝成本『釈氏源流』の言語指向——所引訳経を手掛りに  
馬 駿（中国对外経済貿易大学教授）
  - ③ 仏伝における鉢の靈驗譚考  
高 陽（清華大学専任講師）
- 〈司会〉竹村信治（広島大学大学院教育学研究科教授）

〈コメンテーター〉張 龍妹（北京日本学研究センター教授）

渡辺雅子（学習院大学招聘研究員）

## ◆第二セッション「朝鮮半島の〈仏伝文学〉と天竺世界」

- ① 韓日における「仏伝」の展開——釈迦と耶輸陀羅の関係を中心に——  
趙 恩鶴（韓国外国語大学校非常勤講師）
- ② 『釈迦如来十地修行記』金犢太子譚にみる転生と考  
金 英順（立教大学文学部兼任講師）
- ③ 『安楽国太子経变相図』と『九雲夢図』——朝鮮世祖朝における仏伝  
の展開を背景に——  
染谷智幸（茨城キリスト教大学文学部教授）

〈司会〉河野貴美子（早稲田大学文学学術院教授）  
〈コメンテーター〉松本真輔（韓国慶熙大学校副教授）

## ◆第三セッション「ベトナム、日本の〈仏伝文学〉と天竺世界」

- ① ベトナムの前近代における釈迦の伝記について——『御制重録如来応  
現図』を中心に——  
グエン・ティ・オアイン（ベトナム漢喃研究院准教授）
- ② 「徐道行大聖事跡實録」をめぐる  
高津 茂（星槎大学共生科学部教授）
- ③ 『釈迦の本地』とその周辺  
本井牧子（筑波大学人文社会系准教授）
- ④ 天竺・合戦・幸若舞——十六、十七世紀文芸への視座  
鈴木 彰（立教大学文学部教授）

〈司会〉千本英史（奈良女子大学研究院人文科学系教授）

〈コメンテーター〉川口健一（東京外国語大学名誉教授）

樋口大祐（神戸大学大学院人文学研究科准教授）

#### ◆総括コメント

金 文京（京都大学人文科学研究所教授）

主催 立教大学日本学研究所、文部科学省科学研究費基盤研究（B）

「19世紀以前の日本と東アジアの〈仏伝文学〉をめぐる総合的比較研究」（研究代表者…小峯和明）

共催 立教大学文学部文学科日本文学専修、立教大学日本文学会

#### 【講演・発表要旨】

##### ◇基調講演

日本と東アジアの〈仏伝文学〉——近代と前近代を繋ぐ

小峯和明

日本の〈仏伝文学〉研究はかつての黒部通善『日本の仏伝文学の研究』をはじめ、種々積み上げられてきているが、個別の作品研究が大半であり、どちらかといえば古代・中世に偏向する傾向が強く、近世・近代は充分視野に入っていない印象を受ける。しかしながら、中世の『釈迦の

本地』が古活字版や絵入り整版の刊行、説経・古浄瑠璃の語り物とその正本をはじめ、絵巻・絵入り本の作成等々、近世にこそ流布し、再生産が持続したことをみれば、時代ごとに切斷する史的通念こそが打破されるべきであり、重層化しあう文化と文学状況が問われなくてはならない。

ここでは、従来の古代・中世の観点を一度はずして、あえて近世・近代に視点をずらすことであらたな〈仏伝文学〉の世界の展望を試みた。とりわけ近世の〈仏伝文学〉の始発ともいえる仮名草子『釈迦八相物語』から幕末の合巻『釈迦八相倭文庫』にいたる近世仏伝の展開の概要をとらえ、その延長上にある明治期の講談にもふれ、一方で西洋の仏教学をふまえた近代のあらたな仏伝の様相にも言及した。ともすれば近代と前近代もしくは古典と近代として分斷されがちな領域を横斷し、架橋する試みの一環としての問題提起である。

さらには、そうした作業を経た上で、明代の『釈氏源流』他、東アジアの各種の〈仏伝文学〉の紹介と日本との比較検証の一端にも言及した。

仏伝文学に見えるエロティックな記述を中国人はどう受け止めたか

——『仏所行讃』を中心として——

石井公成

唐代における恋愛文学の代表である白居易「長恨歌」が人気になるにあたっては、楊貴妃の入浴場面の表現の見事さが大きな役割を果たしたと思われる。我々は、その表現になじんでしまっているが、当時の人々にとっては、まさに衝撃的だったに違いない。こうした場面設定は、それまでの中国文学に見られなかったからだ。

この入浴場面が、仏教由来のものであることは間違いない。インドでは、クリシュナ神が水浴する牧女たちの服を隠して楽しんだという伝承が、古代から現在に至るまで人気であることが示すように、若い女たちが水浴する場面は、早くから好まれていた。仏伝においても、女性が沐浴する場面はしばしば見られる。

その他にも、出家しようとする太子を留めるため、父王が美女たちをあてがって快楽にふけらせ、後継ぎの息子を生ませようとする場面や、菩提樹のもとで冥想する太子を魔王の娘たちが誘惑する場面などは、中国の敬虔な仏教信者を当惑させたことだろう。

経典のそうした色っぽい場面については、漢訳者たちが考慮してかなり表現を穏やかに改めていることが多い。たとえば、仏伝文学の代表であってインド文学に大きな影響を与えた *Asvaghosa* (馬鳴) 作 *Buddhacarita* (仏のおこない) の漢訳である曇無讖訳『仏所行讃』では、原文に見える「乳」という言葉については削除するか曖昧な表現を用いている。扇情的な表現を漢訳する場合、淫詩とされる『詩経』衛風の表現を用いていることもある。問題は、漢訳は女性全般を賤しい存在と決めつけ、誤訳している場合もあることだ。

こうした状況について、具体例をあげつつ検討を加えていく。

## カトリックと仏陀——明訳『聖若撒法始末』についての試論

李 昶學

明清の間にカトリックが中国に伝来するに伴い、ヨーロッパの宗教文学ももたらされるようになった。明末イエズス会士龍華民 (Nicholas

Longobardi, 1559-1654) が一六〇二年に翻訳した『聖若撒法始末』(聖ヨサバト始末) は中国に伝来した初めての欧州小説とみることができる。原題を『バルラームとヨサバト』(*Barlaam et Ioasaph*) とするこの作品は『普曜経』の釈迦本生譚からカトリック聖人伝に姿を換えたものであるが、その複雑な伝播過程がそれを一つの独立した文学作品として生成させ、中国語訳『聖若撒法始末』は伝記 (romance) 性に富む文言小説となっている。

それから、龍華民がラテン語から『バルラームとヨサバト』を翻訳した際、その仏典としての出自を知る由もなく、むしろ広東韶州の仏教徒からのカトリックには殆ど墳典がないという批判への反論として翻訳したのであるが、それより先に、当該作品のダイジェスト版が十六世紀の末にすでに日本で翻訳されていたことは、まことにユニークな現象である。宣教学 (missiology) から、『バルラームとヨサバト』の翻訳から、イエズス会の東アジア布教方策上の共通性を見出すことができ、当時の東西文学交流に関する理解を深めることができる。

龍華民の一六〇二年の原訳本はすでに散逸し、今日見られるのは閩人張賡 (1570-1650) が南明の隆武元年 (1645) に閩中天堂で刊行した校訂本で、文彩豊かなものである。本報告は、隆武元年本を底本に、『聖若撒法始末』に深入りし、初めて中国に紹介されたこの西洋の叙事文学 (narrative) を、文学と宗教文化史における意味、方法及び策略からとらえなおしたものである。

(訳・張龍妹)

## ◇第一セッション「中国の〈仏伝文学〉と天竺世界」

『釈迦如来成道記』をめぐる

李 銘敬

唐・王勃（六五〇―六七六）の手になる『釈迦如来成道記』は、中国で最も早い時期に創作された仏伝文学である。清康熙四十五年（一七〇六）編『曲沃県志』の記事によれば、王勃は夙に仏・道・儒という三教に縁を契り、衆多の典籍に精通していたが、虢国参军在任の期間、高宗の勅命を受けて『成道記』を撰した。それは事実ならば、咸亨四年から上元二年までの間、王勃が二十四、五歳ごろであったと想定される。

『成道記』は、対句を駆使して仏陀の生い立ち、出家、修行、成道、説法、涅槃及び入滅後の仏法弘通などの歴史を二百句ほどでまとめた小品の仏伝であり、成立後、靈光寺をはじめ、各地の寺々で重宝され、次々に刻石されてきた。例えば、山西省曲沃県北董郷景明村竜岩寺内の至元十八年（一二八〇）靈光寺沙門徳会の手になる刻碑、大同市善化寺内の『大金西京大普恩寺重修釈迦如来成道碑』（明昌元年（一一九〇）。現存最古）などが現存する。

石碑文に対して、明・洪武丙子の刊行とされる山西崇善寺刊行本、董其昌の手になる墨書なども見られる。明代以後、『成道記』は『釈氏源流』の本文に前置する形で大いに流通されてきた。なお、清代には、董誥等編『全唐文』、蔣清翊『王子安集注』などの文集、胡聘之撰『山右石刻叢編』、『康熙山西通志』、『乾隆新修曲沃県志』などの金石文・地誌にも多く収められている。

勿論、最も広く行なわれたのは、宋・釈道誠撰『釈迦如来成道記注』であった。それは朝鮮半島と日本、ベトナムなどにも多くの版本が現存している有様からも明白である。しかし、それはどのように享受されてきたか、その具体的な事情が必ずしも十分に解明されたとは言いがたい。

宝成本『釈氏源流』の言語指向——所引訳経を手掛りに

馬 駿

明の僧宝成編纂『釈氏源流』は上巻二〇〇話と下巻二〇〇話からなる挿絵入りの仏伝である。上巻の各説話は主として外国人による訳経で、仏陀の誕生から入滅までの一生の足跡を目安にしつつ、相応の記述を一巻に綴り合せたもの。下巻は主に中国人による撰述で仏教が中国に伝来し、定着するまでの史実と人物を時代順に並べつつ、所要の記録を一巻に編み上げたもの。本稿は『釈氏源流』における仏典出自語の識別及びその語法と語彙上の特徴を体系的に指摘することによって僧宝成の言語指向の特徴を捉えてみたい。一、二元化した編纂方針。上巻所引訳・撰経と下巻所引訳・撰経の調査で明らかのように、宝成本『釈氏源流』は上巻二〇〇話と下巻二〇〇話による構造で、前者は外国僧の訳経が中心で、後者は中国人の撰述を骨幹としていながらも、經典の引用は一貫して原典に忠実であるとの態度が示されている。二、対極化した文体特色。訳経の語法の特徴を示す具体例として、「V＋於＋目的語」、「従＋由・自・於＋目的語」、「共＋対象＋V」、「三字連言」と「新・旧訳」の問題を検討した結果、訳経のほうは、とりわけ口語体の語法を用いる傾向が認められることが明らかになった。その特色は『釈氏源流』の上巻と下巻の

文体の相異を象徴する。三、鼎立化した言語接触。『釈氏源流』所引訳経における言語接触の特徴を視野に入れた場合、具体的には、二字語の大量の使用、二字語の鮮明な位相と句式の平易な組合という三点が見逃せない。今後の課題として、各説話の内部を、借用・改変・縫合などの手法によって表現しようとする編者宝成の主体性と独自性の問題も一考に価するだろう。かくして、叙上の編纂方針、文体特色と言語接触の三つの特徴に加えて、宝成本『釈氏源流』の言語指向の解明という立体的な結果にはじめて繋がっていくことになるだろう。

## 仏伝における鉢の靈驗譚考

高陽

中国の明代の『釈氏源流』の「四王奉鉢」を糸口に、仏伝と鉢をめぐる説話について検討した。鉢は釈迦が乞食頭陀行でも用いる必需品であり、最後の涅槃で錫杖とともに残した遺物である。『釈氏源流』の当該説話は、『仏本行集経』を出典とし、大幅に抄出している。釈迦は自ら乞食用の鉢を持ちたいと考え、その心を読んだ四天王が鉢を釈迦に献上するが、釈迦が一つだけ受け取ったらほかの三人に恨まれることを考慮し、四人の献上した四つの石鉢を一つに合体させたという話題である。ほかにもたとえば、釈迦が鬼子母神の子供を鉢の中に隠してしまう話のように、鉢が靈異性を示す話題も見え、仏伝と鉢の縁の深さを物語っている。中国ではすでに、美術史の視点から多様な鉢信仰の様相を解明した李静杰の論文（『佛鉢信仰与伝法思想及其圖像』『敦煌研究』二〇一一年第二期）がある。この論文によりつつ、中国再生の仏伝（敦煌変文の「八

相変」など）も視野に入れ、仏伝と鉢とのかかわりを検討し、さらに仏伝の鉢説話を整理し、鉢の起源、靈驗、及びその消失から、鉢の消長が仏法の盛衰に関係していることを明らかにし、またそれ以後の日本の唱導資料や中国講唱文学などの鉢説話の例を挙げながら、その変容と展開の一端を覗いてみた。（『仏伝文学』と鉢が深いかかわりを持っていること、鉢の持つ機能や意義の重要性への再認識が必要だと考えられる。

## ◇第二セッション「朝鮮半島の〈仏伝文学〉と天竺世界」

韓日における「仏伝」の展開——釈迦と耶輸陀羅の関係を中心に——

趙恩鶴

仏典における釈迦の一代記は、「仏伝」として多くのテキストを生み出し、あらゆるジャンルの中でそれぞれの特徴を持つて展開した。漢訳仏典が韓国や日本に伝来した初期の「仏伝」は、仏典の原型を保つ形で享受された。しかし、時代がくだるとより物語化が進み、登場する人物たちの関係性や心情表現などにおいて著しい変化が生じた。特に、摩耶夫人と釈迦、そして釈迦が出家した後生まれた羅睺羅との親子関係や釈迦と耶輸陀羅の夫婦の物語など、出家と成道を前後にした、人間としての釈迦の葛藤が目立つ。

特に、仏典にみる釈迦と耶輸陀羅の不仲の関係は中世以降になると、釈迦が人間性を越えて仏となるとところに重点がおかれ、仲の良い夫婦関係と離別の悲しみが強調される展開へと変化していた。そして、韓国の高麗時代以降の「仏伝」からも、日本と同じく釈迦と耶輸陀羅の関係の



変化が確認でき、主に、出家前に釈迦から渡された「お香」のモチーフに注目した。羅睺羅の出生と不貞疑惑からの母子の危機を釈迦に知らせる「お香」は、朝鮮後期にハングル本としてもっとも流布した『八相録』に受容され、より劇的な展開へと繋がっていく。さらに、敦煌資料『悉達太子修道因縁』からも釈迦の成道以前の内容に重きをおいていることや「お香」のモチーフが確認でき、敦煌資料との関連性を指摘した。

以上の各国のテキストにおける「釈迦と耶輸陀羅」の関係の変化は、法会の場合や女性信者を対象にした背景の影響が想定でき、一方では「仏教」という宗教的な意味から離れた「物語」としての変化と享受があったことを、東アジアにおける「仏伝」の展開の一つの特徴として提示した。

#### 『釈迦如来十地修行記』金犢太子譚にみる転生と孝

金 英順

韓国に伝わる〈仏伝文学〉の中でも、高麗末期に撰述された『釈迦如来十地修行記』には、父母のために我が身を犠牲にする父母孝養をモチーフに菩薩行が説かれる話が多く、第七地の金犢太子譚も母への孝を主旨に語られる。この話では、釈迦の前生である太子が生まれて直ぐに猫とすり替えられて殺された後、金牛に転生して労役に苦しむ盲目の母親を救い開眼させたという太子の母への孝が動物転生をモチーフに語られる。また、朝鮮末期には本生譚ではなく、牛に転生した西域国太子の孝行物語として改変され、ハングル本古小説『金牛太子伝』に再生される。

金犢太子譚をめぐる研究では、インドや中国にその典拠を見つけることができない、韓国古代の変文類から根源を探る必要があると論じられ

てきた。ところが、中国と日本で翻刻紹介された敦煌出土の写経『仏説孝順子修行成仏経』に金犢太子譚と酷似する本生譚が語られているのが確認されたのである。『仏説孝順子修行成仏経』は唐代の『衆経目錄』『疑経目錄』に経名がみえる中国撰述の經典とされるが、まだ充分詳しい研究がなされていないのが現状である。そこで、本発表では、仏伝の金犢太子譚を中心に、太子の猫とのすり替えや、牛転生などの人と動物との交渉が物語においてどのような意義をもつのか、また、太子のように人が牛に生まれることは東アジアの宗教や説話においてどのような意味を持っているのかについて考えてみた。

#### 『安樂国太子経変相図』と『九雲夢図』

——朝鮮世祖朝における仏伝の展開を背景に——

染谷智幸

従来の、東アジア古典研究に対する日本からの視点には、二つの大きな欠落（と同時に隠蔽）がある。一つは中世までの三国（天竺・震旦・本朝）観、近世以後の漢意批判（本居宣長）の日本中心・日中中心史観による朝鮮の欠落（と同時に隠蔽）の問題。もう一つは、朝鮮時代Ⅱ儒教・朱子学という図式的理解による朝鮮時代、或いは朝鮮全般における朝鮮仏教（+道教）の欠落（と同時に隠蔽）の問題である。

両者ともに重要な問題ではあるが、前者に関しては子安宣邦氏を始めとする批判（『歴史の共有体としての東アジア』藤原書店、二〇〇七年）等もあり、日本において認知されつつあるのに対して、後者はそうした状況にないばかりか、さらには本国の韓国における古典研究の視座にお

いても存在する問題である。

本稿では、特に後者の問題に視点を据えつつ、朝鮮時代の古典小説の傑作『九雲夢』（一六八七年成立）を材料にし、その仏教的背景を探りながら、朝鮮時代の古典の背後に広がる仏教的世界観の有りよう、その一端を明らかにする。

特に『九雲夢』を絵画化した『九雲夢図』に描かれる八仙女と、世宗大王が編纂した仏伝『月印千江之曲』（後に世祖が著した『月印釈譜』に所収）所載の「安楽国太子経」を絵画化した『安楽国太子経變相図』（一五七六年以前に成立）に描かれる八綵女が極めて近似することから、両者の繋がりを考えつつ、朝鮮における八大菩薩の文芸化について述べる。従来の朝鮮古典小説研究は文字資料中心の考察が多いが、絵画資料を加えることによって、新たな視座を得る可能性を示唆した。

### ◇第三セッション「ベトナム、日本の〈仏伝文学〉と天竺世界」

ベトナムの前近代における釈迦の伝記について

#### ——『御制重録如来応現図』を中心に

グエン・ティ・オアイン

ベトナムの前近代における釈迦の伝記についての先行研究はまだ見られない。釈迦の出家、成道などについて記した最初の資料は、二世紀末から三世紀初期まで生きていた交州の牟博によって書かれた『理惑論』である。しかし、それが初めてベトナム語に翻訳されたのは一九七五年のことであった。同書は、ベトナムにおける仏教の受容と展開の歴史を

研究するための研究対象とされてきたが、釈迦の伝記自体についての文学的研究はまだ見られなかった。その上、『御制重録如来応現図』や『釈迦如来成道記』などの釈迦伝記についての資料が伝存しているという点と自体を、近年までベトナム人の研究者は殆ど知らなかったのである。最近、立教大学の小峯和明教授を初めとして、日本人の研究者がベトナムにおいて資料を調査し、蒐集するなかで、『釈迦源流』について写本五点のコピー本と刊本六本の『釈迦如来応現図』の存在を確認した。唐・王勃『釈迦如来成道記』（ベトナム版）は二〇〇五年に小峯教授が岩波書店の『文学』に紹介したが、他の資料はいずれもまだ紹介されていない。筆者は、小峯教授グループの調査に参加し、その資料の研究をはじめた。今回は、ベトナムの前近代における釈迦の伝記について、『御制重録如来応現図』を中心に紹介した。特に『御制重録如来応現図』の諸本を検討し、最古のテキストを対象として分析し、釈迦の下天・託胎・出胎・出家・降魔・成道・転法輪・涅槃の区分に従って、物語と図像の両方を概括した。また、最後に、『御制重録如来応現図』を木版で出版した代表的な寺院を紹介し、ベトナムの仏教作品の彫刻史について論じてみた。本発表で示すベトナムにおける釈迦伝記についての情報と研究成果は、ベトナム人研究者だけではなく、東アジアの研究者にとつての新たな知見となることが期待される。

#### 「徐道行大聖事跡實録」をめぐる

高津 茂

徐路、一般には道行禪師と呼ばれたティニダルウチ派南方禪第一二代宗祖徐道行（?—一一一七）に関する仏教説話「徐道行大聖事跡實録」

〔越甸幽霊集録全編〕「重補越甸幽霊集録」ハン・ノム研究院 蔵書番号 A289: (重補は19世紀初頭嘉隆から嗣徳年間にかけての作品) を紹介し、『禪苑集英』(一二三三七) 卷二「道行禪師」や『嶺南摭怪列傳』卷之二「徐道行、阮明空傳」、等々や『大越史記全書』本紀全書 卷之三 李紀二 神宗の項や『越史畧』卷二 壬辰會祥大慶三年(一一二二)等の史書をも参照して仏教説話とその解題を試みた。また、ハン・ノム研究院書院蔵の神蹟の中で、徐道行を神として祀る五つの神蹟と四つの神敕、一つの俗例を示し、徐道行伝承の信仰圏が山西省安山県を中心としてハノイ周辺の河東・興安・南定・太平・福安・父安に及ぶことを明らかにした。

徐道行の父徐榮は僧官で、聖宗の子であり仁宗の弟である延成侯に邪術をもって対立していたため、延成侯は大顛禪師に頼んで徐榮を呪い殺した。そこで、復讐を誓った徐道行は、説話では明空・覚海禪師とともに天竺に赴き強力な靈法や化身の術を学び帰り、さらに仏跡山で修行の後、大顛禪師を呪殺した。また、覺皇を呪殺したために捕われたとされるが、運よく崇賢侯のおかげで救われ、道行はこのことに感謝し、崇賢侯夫人に投胎を請い後の李神宗に生まれ変わったとの説話を持つ。また一説では、崇賢侯夫人杜氏は入浴中を徐道行に覗かれたあと、にわかに妊娠し男子陽煥を生む。同時に徐道行は仏跡山の岩窟で亡くなった。仁宗の養子となった陽煥は、李朝第五代皇帝神宗(在位一一二八―一一三八)として即位し、世に徐道行禪師の生まれ変わりと言われた。このような復讐、転生という題材は、一般的仏教説話の持つ寓意に乏しく、「非日常的暴力的靈異の世界」や「性的なエネルギーと懷妊という呪術」として天竺が認識されていることを窺わせるとともに、当時の李朝政權の崇佛政策や鎮護国家体制の志向と不可分とも思われる。また、密教の強い影響やその強力な靈異を示している。

以上から、ヴェトナム仏教説話には、宋代中国仏教の儒教・道教・仏教の三教を基盤としながらも、「12世紀のヒンドゥー文化の影響」を窺わせる解釈が成り立つ説話が存在すると考える。

## 『釈迦の本地』とその周辺

本井牧子

中世に成立した和製の仏伝『釈迦の本地』は、『法華經』寿量品の經文にもとづく序にはじまり、寿量品注釈の文脈で引かれる釈迦の久遠成道を説く文言で幕を閉じる。作品の成立基盤に『法華經』およびその注釈世界があり、『法華經』の説く久遠成道の釈迦の伝という枠組みが物語の基底に存在することをうかがわせるものである(拙稿『釈迦の本地』とその基盤―『法華經』とその注釈世界とのかかわり― 神戸説話研究会編『論集 中世・近世説話と説話集』和泉書院、平成二十六年)。

しかしながら、釈迦の一生を一篇の物語として和文で通読することを可能にした『釈迦の本地』は、ひとたび成立すると、『法華經』という枠組みを超えてさまざまな展開をみせることとなる。本発表では、『釈迦の本地』の表現に着目し、『本地』諸本と、仏伝にかかわる唱導資料、和讃、絵巻、絵画作品といった周辺のさまざまなメディアとの重なりを指摘することで、その諸相をうかがいあがらせるを試みる。とくに『釈迦の本地』と仏伝絵画作品との交渉については、すでに小峯和明氏による指摘があるが(『『釈迦の本地』の物語と図像―ボドメール本の提婆達多像から―』『文学』一〇一五、平成二十一年ほか)、これらの指摘を裏付ける愛知県東龍寺蔵の仏伝涅槃図をとりあげ、『釈迦の本地』の展開



の一例として、絵巻化における具体相を提示したい。

## 天竺・合戦・幸若舞

### ——十六、十七世紀文芸への視座

鈴木 彰

幸若舞曲は、十六世紀の中後期に芸能としての最盛期を迎えた。この時期、日本社会は西洋を含めた異国の人々や異文化と出会い、交渉を重ねていくが、そのなかで、伝統的な三国世界観にもとづく世界認識を具体的に再編する必要性に迫られることとなった。それは当然、日本と天竺の歴史的関係や、天竺なる土地そのものへの理解と想像力のありようにも及ぶことになる。キリスト教が「天竺宗」と呼ばれたことや、豊臣秀吉が朝鮮出兵をめぐる構想を語るなかで「天竺」まで手に入れることを口にしていたことは著名だが、それらはいずれも、この時期に、実体的な知識と未知なるものへの想像力とのほざまで、天竺認識がゆらいでいたことを象徴する出来事といえる。本発表では、十六世紀社会に幸若舞曲が及ぼしていた作用を把握し、その文化史的意義を見定めていくための一歩として、自国意識と表裏をなす天竺観に焦点をあわせて、まずはその表現・言説の特質とそれに伴う価値観を掘り起こした。その際、幸若舞曲の、〈合戦〉を享受するための文芸としての側面に光を当てた。